

施設実習の意義を再確認する

－履修後の学生アンケート調査から－

Reconfirming the Value of the Nursing Home Practical Training :
Results of a Questionnaire Administered at the End of the Course

佐々木昌代

大坪 祥子

大坪 邦資

Masayo SASAKI, Shoko OTSUBO, and Kunisuke OTSUBO

I. はじめに

施設実習（保育所を除く児童福祉施設での実習）を履修することの一番の意義が自己確知にあると示唆してくれたのは、実習を終えた学生達の姿であった。例えば、国立宮崎病院（現在は独立行政法人国立病院機構宮崎病院）の重症心身障がい児病棟で実習を行ったある学生は、「子ども達がとっても純粋で、自分の好い加減なところや汚い心を見透かされているようで怖いぐらいだった。自分はもっとしっかりと生きないといけないと思った。」と、神妙な面持ちで語ってくれた。仲良しグループで実習した学生達には、「宮崎病院で実習できてほんとうによかった。感激しっぱなしだった。来週はみんなで運動会に行きますが、絶対に素晴らしいから、先生も一緒に行きましょう。」と誘われ、その言葉通りに素晴らしい体験をした。その折、実習指導担当の保育士の方に「ご指導のお陰で」と謝意を伝えると、「子どもがいいんです。醜い心を置き忘れて生まれてきて、自分より周囲のことを先に考える優しい子どもばかりですから。」と応じられた。学生達が、宮崎病院での実習を通して、子どもの生活する姿と子どもを援助する職員の方々の姿勢から、見かけの障がいに惑わされることなく、真摯に学び、我が身を振り返ったことが分かった。

言うまでもなく、このような学生の姿は宮崎病院での実習生に限らない。FD活動による自己評価や学生による授業評価が常態化する以前から実習指導を総括する目的で実施してきた学生に対する実習全般に関するアンケート調査によると、学生は資格・免許を取得するための一連の実習を次のように捉えていた¹⁾。

< 1年次2月の保育所実習 >

初めての实習であるので、先ずは保育現場のあらゆることを「知る」実習である。

< 2年次6月の幼稚園教育実習 >

具体的な遊び（保育内容）を準備して実習に臨み、子ども達と遊びを介して関わることからその発達段階を具体的に把握し、研究保育を計画・実施することによって実践的な保育の知識と技術を「学ぶ（身に付ける）」実習である。保育指導案、実習記録簿がしっかり書けるようになる実習でもある。

< 2年次夏季休業中の施設実習 >

障がいや家庭の問題といった困難を抱えた入所児童（子ども）・入所者（大人）に励まされ

て実習を行い、その懸命に生きる姿に「感動する」、偏見や思い込みを払拭して「自分自身を振り返る」実習である。

<2年次11月の保育所実習>

それまでの学校での学習と実習経験を生かして、「一人前の保育者（保育士）として取り組む」実習である。

施設実習が「感動する」「自分自身を振り返る」実習であるというのはあくまでも他の実習と比較してのことであるが、目から鱗が落ちる体験をして自己覚知に至るということは、実習指導書や実習テキストによると、保育所実習や幼稚園教育実習には積極的に掲げられていない、施設実習に特徴的に掲げられている実習目的である。

ここで、実習指導書にある施設実習の意義と目的を引用しておく。

<施設実習の意義>²

保育所以外の児童福祉施設で児童および職員と生活を共有することにより、多くを学び、将来より良い保育士となるための資質を高めることにある。

<施設実習の目的>³

①対象施設の理解

施設の現場に身を置くことにより、困難を抱えた入所児童・入所者の現実と、そこで援助に関わる職員等の働きの現状を知る。

②入所児童・入所者の理解

施設で生活する入所児童・入所者の抱えている困難やハンディについて理解を深め、援助の技術や関わり方を学ぶ。

③職員の職務の理解

児童福祉施設等の果たす役割と機能、施設職員としての保育士の果たす役割を実践的に捉える。

④自己覚知

困難を抱えた入所児童・入所者の生活や生きていく姿に関わり、そこで働く保育士等援助者の姿勢を学ぶことにより、保育士資格を有する者としての生き方を捉え直し考える機会とする。

⑤施設を取り巻く社会の理解

ノーマリゼーションの思想の普及により地域や社会に開かれた施設を目指す傾向が強い。地域の様々な機関とどのように連携し、地域交流のための行事がどのように行われているかなどについて学ぶ。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見

保育士の働きの大切さとその技術や姿勢を学ぶことにより、養成校で学習してきたことを現実的かつ具体的に捉え、保育士を目指す者として自覚を高め、今後の学習課題を見つける。

本研究は、これら施設実習の意義と目的を踏まえつつ、学生自身が実習を通して受けとめた施設実習の意義について明らかにすることから、今後の実習指導に資する方向性を得ようとしたものである。

II. 研究の目的

「保育実習Ⅰb（施設実習）」を履修した学生にアンケート調査を実施し、学生自身が受けとめた施設実習の意義である「施設実習を履修して何が残っているか、何を得られたか」ということについて、先に示した〈施設実習の目的〉①～⑥に沿って学生の回答を集約・分析して、次年度以降に施設実習を履修する学生の事前指導に有効な資料および今後の実習指導の方向性を得る。

III. 研究の方法

- 調査対象 平成19年度「保育実習Ⅰb（施設実習）」履修者 210名
平成20年度「保育実習Ⅰb（施設実習）」履修者 200名

＜施設種別ごとの実習配当＞

施設種別	平成19年度		平成20年度	
	施設数	配当数	施設数	配当数
知的障害者授産・更生施設	14	94	13	91
児童養護施設・乳児院	9	31	9	40
児童自立支援施設	1	8	1	8
知的障害児施設	6	58	5	50
肢体不自由児施設	2	12	2	9
重症心身障害児病棟	2	7	1	2
計	34	210	31	200

- 調査時期 平成19年度 9月の「保育内容の研究健康」授業において実施
平成20年度 10月の「保育指導法Ⅰ」授業において実施
(実習施設側の事情により12月に履修した学生については12月に個別実施)
- 調査内容⁴ 施設実習全般を総括して、次年度の実習前・後指導に活用するために実施している「施設実習（保育実習Ⅰb）アンケート」に以下の質問を設けて行った。
- 質問 施設実習を体験して、心に残った、感じた、考えた、気付いた、困ったことなどがあれば書いてください。

IV. 結果（アンケート集約）

一人一人の回答には、各々の学生が施設実習を履修して気付いたことや考えさせられたことが記述され、施設や施設の入所児・入所者に対する様々な思いが籠められていて、何れの記述も等閑に処理することはできないが、〈施設実習の目的〉の各項目ごとに、もっとも典型的な記述を回答例として掲げた。

○平成19年度

平成20年度の施設実習履修者に対する事前指導の資料として理解されやすい内容とするために、先に各々の学生の回答を意味微分し、次に項目ごとに分類、集約・分析した。平成20年度の結果と比べて、回答数が多いのはこのためである。

<知的障がい者授産施設・知的障がい者更生施設>

①対象施設の理解（回答数：130）

- ・利用者の方は皆さん年上の方で、人生経験も長く、作業や周りの人のことを教えていただいたり、今まで経験したことのない優しさ、気配りを味わい、とても心が温まった。
- ・考えていた方々とは違い、接してみるととても楽しかった。怖いと思っていた自分がほんとうに恥ずかしく、利用者の方は優しい心を持った方ばかりだった。
- ・障がいを持っていようがいまいが毎日楽しく、ただ知的な面の発達が遅れているだけで私達以上に感情が豊かで、正直に生きていて幸せだと思った。
- ・作業の中で分からないことも、利用者の方々が教えてくれたりして、とても助かった。これが当然の社会になったらよいと思った。
- ・球技大会では全員が一つになって頑張り、最後の試合では皆の一生懸命さに感動して涙が出た。尊敬できる人達ばかりだった。
- ・障がいを抱えて生きている利用者の方々は、とても明るく優しい人ばかりだった。職員の方の言うことを聞き、精一杯頑張る人々ばかりだった。

②入所者の理解（回答数：20）

- ・どう接すればよいか困ることが何度もあったが、職員の方に利用者の方について質問をしたとき、その方の歩んできた道や時代背景など詳しく教えてくださったので、翌日から利用者の方一人一人を受け入れて接することができた。
- ・性格や育った環境、病気の有無などがあり、利用者一人一人に合わせながら平等に接することが難しかった。

③職員の職務の理解（回答数：9）

- ・利用者ができることは自分でやってもらい、何でもやってあげるのではなく、できることが増えるように援助していくことが必要だと思った。
- ・配慮や気配りは大切だが、その利用者が何をしたいか、何を考えているかを察して接するのは、私達が普段、友達や家族と関係を保つようにするのと全く同じだということを感じた。

④自己覚知（回答数：31）

- ・実習を通して、障がい者の方のイメージが変わり、いろいろな施設に行って、いろいろな方と関わりたいと思った。
- ・怖いと思っていたが、コミュニケーションやスキンシップを取っていくうちに、一人一人の障がいを個性と考えることができるようになった。
- ・どんな重い障がいを持っている方もみんな同じ人間で、みんな平等だと言葉で言うのは簡単だが、実際にそう感じた。
- ・一緒にいるだけで不思議な気持ちになったが、そんな気持ちが大切だと感じた。言葉では表すことのできない、体験しないと分からない気持ちが出てきて、私の人生でとても大きなものになった。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見（回答数：3）

- ・保育園、幼稚園より施設の方が合っているのかと考えさせられた。

<児童養護施設・乳児院・児童自立支援施設>

①対象施設の理解（回答数：11）

- ・普段触れ合えない子ども達と生活を共にし、キャンプにも参加させていただき、貴重な体験をした。問題があつて入所してきた子どももいたが、みんな一人一人が優しく素直で、よい子ども達ばかりで、たくさん助けてくれた。ここで実習できて本当によかった。
- ・親からの電話に喜んだり、家族の話を口にする子どもの姿に、親の存在の大切さに気付いた。施設の子どもに対する実習前の戸惑いが消え、こんな子どもに関わる仕事もやってみたいと思った。

②入所児童の理解（回答数：7）

- ・自分から積極的に挨拶したり話しかけることを心掛けたら、子ども達が馴染んでくれてうれしかった。入所理由が気になってぎこちなくなることもあったが、先生に相談してどうしたらよいか考えさせてもらえた。
- ・集団生活の中で思い通りにならず、けんかになったりするが、その時の互いの子どもの気持ちを受けとめることが大切だと思った。年齢による援助、配慮の違いを特に感じた。

③職員の職務の理解（回答数：5）

- ・いかに家庭と同じ環境で生活できるかがポイントだと思った。どんなによい環境でも親代わりの保育者が愛情を持って接しなければ意味がない。このことについて本当に考えさせられた。

④自己覚知（回答数：8）

- ・子ども達は、すごく元気で、強い子ばかりでした。親からよい扱いを受けていなくても「お母さんに好きになってもらおう」という気持ちを持って生活していて、色々なことを考えさせられた。自分自身の力に繋がった。
- ・不安でいっぱいだったが、短い期間に貴重な経験ができて感謝している。自分に帰る家があつて、家族がいて、短大に通えることが当たり前ではなく、本当に幸せなことであること、両親のありがたさを実感した。

<知的障がい児施設>

①対象施設の理解（回答数：44）

- ・同じ障がいでも一人一人特性が違い、教科書では書かれていないことがたくさんあつて、実際に関わってみることが大事だと改めて感じた。
- ・同じような障がいでも、一人一人全く違って、その子どもなりの表現の仕方があることに気付いた。
- ・最初は怖くて上手につきあえなかったが、日が経つにつれてとても可愛く思え、一緒に遊ぶのが楽しくなった。
- ・障がいを持っている方々とあんなに身近に接するのは初めてで不安や戸惑いも多くあったが、私にはないものをたくさん持っていた。

②入所児童・入所者の理解（回答数：7）

- ・最初は戸惑ってどうしたらよいか分からなかったが、段々接していくうちに子ども一人一人の接し方があつて勉強になった。

- ・障がいがあるといっても、私達とあまり変わらず、逆に掃除や遊び一つ一つに一生懸命でした。できないことに少し手助けするだけで、できる子どもが多かった。

③職員の職務の理解（回答数：11）

- ・最初は接し方が分からなかったが、職員の方が子どもと関わっているのを見て、聞いて、普通に接すればよいと感じた。
- ・「知的障がいがあるから分からないではなく、彼ら、彼女達の世界がある」という施設の方の言葉がすごく心に残って、考えさせられた。私達の世界が普通という考えでなく、私達は…、あなた達は…と分かってあげることが大切だと気付いた。

④自己覚知（回答数：17）

- ・初めてで何もかも勉強になった。みんなでダンスを踊っているところを見て、「一生懸命」「必死」という言葉の本当の意味を理解できた。
- ・障がい者は重いイメージだったが、実習で、障がいの有無や重さに関係なく一人の人として抵抗なく関われるようになった。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見（回答数：10）

- ・自閉症の子どもが多く、考えさせられる部分も多くあったので、自閉症のことをもっと深く学びたいと感じた。
- ・やりがいのある仕事だと感じた。就職に当たって、視野に入れていきたい。

<肢体不自由児施設・重症心身障がい児病棟>

①対象施設の理解（回答数：12）

- ・訓練や治療、けいれんが起こったりなど、とても辛いと思うのに、笑顔があり、たくさん励まされた。
- ・小さな命が力強く生きていると感じ、命の尊さを実感した。

②入所児童・入所者の理解（回答数：3）

- ・食事介助や入浴介助などを体験して、それぞれの難しさを知ることができた。食事介助の時は、どうやってよいかわ最初は戸惑ったが、段々コツが掴め、よい経験ができた。

③職員の職務の理解（回答数：3）

- ・施設の中での保育士の役割は、一人一人に合った療育をすることが大切で、一人一人の性格などをしっかり観ておくことが大事だと思った。一番大切なことは洞察力だということを学んだ。

④自己覚知（回答数：5）

- ・初めは可愛そう、怖い、不安な気持ちでいっぱいでしたが、利用児・者との関わりを通して、差別や偏見を持つことがなくなり、毎日が楽しかった。
- ・初めの一週間は辛いと感じたが、先生に自分から時間をもらって分からないことなど聞いたり話したりして、指示待ちでなく自分達で動くということが分かり、勉強になった。すると、利用児・者も自然と介助を求めてくれるようになり、うれしかった。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見（回答数：3）

- ・実習が障がい者の方について知りたいという切っ掛けになった。

○平成20年度

<知的障がい者授産施設・知的障がい者更生施設>

①対象施設の理解（回答数：39）

- ・自分の中で、障がいというイメージは、学校で習ったことなどの固定概念が強くあったけど、実習に行き、みんな一人一人私達と同じように個性があり、心優しく、純粋な気持ちを持っていて、私自身励まされ、元気づけられたことがあった。施設で働くのも悪くない、とてもやりがいがある仕事だと感じた。
- ・知的障がいのある方は私達以上に心がきれいだと感じた。仲間を助ける優しさが本当に強くあり、利用者の方からもたくさん学ぶことがあり、貴重な体験ができたと思う。
- ・利用者の方と職員の方がとても仲が良く、常に笑顔でいらっしやるのが一番印象に残っている。何を言っているのか聞き取り難かったり、分からなかったりしても、その方の表情をよく見て真剣に向き合えば分かったと思う。

②入所者の理解（回答数：32）

- ・最初は怖くて会話するのにいっぱいだったけど、日が経つほど積極的に会話を楽しんだり、手遊びをして利用者の方とのスキンシップも増え、毎日充実していき、本当に楽しい実習だった。これからは、どんな障がいのある方にも自分から話せる自信がついた。
- ・障がいがあっても、私達と同じような考えや感情を持っていて、特に違うことはないと思った。全てをやってあげるのではなく、少し手を貸せばよいだけだと教えていただいた。
- ・利用者の方一人一人の接し方が違い、あまり親しくなりすぎてもいけなく、ある程度の距離を保って接することが必要なのだと感じた。

③職員の職務の理解（回答数：5）

- ・〇〇ができないから援助するという考えではなく、不自由なところは共に助け合い、より快適に過ごせるように援助していくということを考えた。

④自己覚知（回答数：15）

- ・何事にも一生懸命だった。暑い中の活動でも、誰一人「暑い」「だるい」と口に出す方はおられなかった。自分はすぐに「暑い」「だるい」と言うので、利用者の方々を見て、自分を振り返らなくてはいけないと思うところがたくさんあった。
- ・利用者の方からたくさん学ばせてもらった。すごく心がきれいで、優しく、思いやりがあって、私達の忘れていた心があり、自分を見つめ直すことができた。また、諦めないで、一つの作業に一生懸命な姿はとても素敵で、心が温かくなった。
- ・入所者の方はいつも笑顔で、素直で、きれいな心を持っていた。今まで、障がい者の方を差別的な見方で見ていた自分が情けなかった。障がいは不便だけど、不幸ではないと思った。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見（回答数：5）

- ・お楽しみ会や音楽療法に参加させていただいて、自分達の力が発揮でき、楽しかった。
- ・知識を持って実習に取り組めたら、もっと援助ができたのではないかなと思った。

<児童養護施設・乳児院・児童自立支援施設>

①対象施設の理解（回答数：16）

- ・始めは近寄り難かった子どもが、心を開いてくれて、ゲームでは私を守るように考えて遊んでくれた。先生達がすごく相談に乗ってくれて、たいへん良くしていただいた。施設と聞くと固いイメージしかなかったが、家みたいなのだと気付いた。
- ・子ども達はみんな明るく、誰とでも話すことができ、始めは緊張していた私も二日目には子ども達と楽しく遊ぶことができた。また、先生方の援助を見て、とても愛情が感じられ、学園全体が一つの家族のようだったと思った。

②入所児童の理解（回答数：14）

- ・子ども達の言葉が最初は冷たく感じたが、少しずつ冷たい言葉もその子ども達なりの表現の仕方だと分かった。普段の生活の中では味わえない経験をたくさんでき良かった。自分の気持ちをストレートにぶつけてくるので、しっかり受けとめてあげることが大切だと気付いた。
- ・一人一人との関わりから、抱えているもの、陰の部分が見えたときに何とも言えない気持ちになり、受けとめていけたらと思った。

③職員の職務の理解（回答数：8）

- ・子どもの親でもあり先生でもあり、子ども一人一人の性格を把握して子どもを育て、成長に携わる施設の先生の難しさ大切さを知った。子ども達と一緒に遊ぶのは楽しいが、保育者の立場で子ども達と接する難しさを感じた。
- ・先生方の子ども達への心からの愛を感じた。一人一人のことを本当によく理解され、私の質問にもすぐに適確に答えてくださった。子ども達が安心して生活できるのも、保育士の方々の細やかな配慮と援助によって、確かな絆が形成されているからだと感じた。

④自己覚知（回答数：7）

- ・自分の今の状況のありがたさだった。何かをしていく中で、親の力を借りていないつもりでもどこかで借りていて、甘えているのだと思った。自分自身の贅沢さに気付くことができた。
- ・子ども達が愛情を求めているのはすごく伝わってきたし、何か抱えているものも感じたし、親と一緒に生活できることの幸せを実感した。

<知的障がい児施設>

①対象施設の理解（回答数：19）

- ・障がいを持っているのに、みんな元気で前向きだった。逆に自分の励みになった。元気をもらった。
- ・一生懸命さが伝わった。私達にとっては簡単なことがスムーズにできなくて、大変そうだったが、時間がどれだけかかろうとも最後までやり遂げる姿に感動した。

②入所児童・入所者の理解（回答数：15）

- ・子ども達はとても関わり合うのが好きだった。子どもの言っていることが聞き取れなくても、聞こうとする姿勢をしていると、それを感じてうれしそうにしてくれて、とても感動した。
- ・障がいがあっても、言葉だけでなく、表情だったり、スキンシップだったり、様々なコミュニケーションが取れた。もっとコミュニケーションが取れないと思っていたから、驚いた。

食事介助も、すごく勉強になった。

③職員の職務の理解（回答数：3）

- ・子ども達と触れ合い、先生方からお話を聞かせていただいて、障がいのある子ども達への理解を深めることができた。周りにいる私達が全てを教えていくのではなく、一人一人に必要なに応じて援助し、一人一人の可能性や能力を引き出してあげることが大切だと感じた。

④自己覚知（回答数：4）

- ・入所している方達と触れ合うことで、本当に心が素直な方ばかりで、もっと自分の視野を広げるべきだと強く思った。
- ・「子ども達はずっと施設にいて幸せなのかな」と思ったのは間違いだった。自分は親に本当に感謝すべきだと思った。子ども達と関われ、思い出ができ、障がいを持った方と触れ合うことは楽しいことだと感じた。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見（回答数：1）

- ・施設は、イメージしていたこととは全然違って楽しく、利用者の方とも楽しく関われたが、もっと障がいについて詳しく知っていたら、もっといい実習ができた。

<肢体不自由児施設・重症心身障がい児病棟>

①対象施設の理解（回答数：4）

- ・肢体不自由児の子どもも普通の子どもと変わりなく生きていて、私達にない根性をもっていてすごいなあと思うことがたくさんあった。
- ・車椅子に乗っていても、喋ることができなくても、少しの変化でその子どもの気持ちを感じることができた。障がいを持っていたても、健常児と変わりはないのだということに気付いた。

②入所児童の理解（回答数：2）

- ・最初は患者さんへの対応やオムツ交換に不安があったが、保育士さんや看護師さんのアドバイスや言葉かけなどにより、少しずつ積極的に関わることができた。患者さんが笑ってくれることで、とても元気になった。

③職員の職務の理解（回答数：2）

- ・今までにない実習で、自分がどこまでしていいか判断するのがとても大変だった。

④自己覚知（回答数：1）

- ・肢体不自由な方の病棟で、どんどん筋力が低下して自分で動かしたり歩いたりすることができないのに、とても元気で明るい患者さんばかりで、私の方が逆に実習中元気づけられた。日常生活で手や足を動かせること、トイレやお風呂に自分で行けることは当然の前ようで、とてもすごいことなんだと感じた。

V. 考察

学生の回答には様々な思いが籠められていて、施設実習の目的①～⑥に沿って集約・分析することは容易な作業ではなかった。しかし、その作業自体が施設実習の意味の再確認になった。即ち、目的①～⑥に沿って回答を振り分けていく際の分けて戻してまた分けるという作業の繰り返しの中

で、学生が施設実習で得てきたものが見えてきたように思う。

回答は入所児童・入所者との関わりについての記述が大半であったが、関わったことで入所児童・入所者を理解することができということが中心に記述されている回答は①対象施設の理解に、関わり方についての気付きやより深く入所児童・入所者を理解しようと関わり方や援助の仕方を工夫したことが記述されている回答は②入所児童・入所者の理解に、具体的な関わり方や援助の仕方を方向付ける保育士（施設職員）としての考え方についての気付きが記述されている回答は③職員の職務の理解に、それぞれ集約した。

入所児童・入所者や入所児童・入所者と施設職員との信頼関係に「感動した」「驚いた」と書かれた回答も多かった。感動して施設や入所児童・入所者に対する認識を新たにしたりと記述されている回答は①対象施設の理解に、入所児童・入所者とコミュニケーションや気持ちが通じた喜びが記述されている回答は②入所児童・入所者の理解に、自分自身を振り返ったことや自分自身の考え方が変化したことが中心に記述されている回答は④自己覚知に、それぞれ集約した。

①対象施設の理解に関わる回答から

施設実習の実習訪問に出かけて実習の様子を尋ねると、まず、異口同音に「施設を理解してもらえれば」「入所児童・入所者と積極的に関わって理解を深めてもらえれば」といった実習生に対する期待の言葉が返ってくる。学生の回答からは、そのような施設側の期待に応えている様子がうかがえる。しかも、「尊敬できる人達ばかりだった」「たくさん助けてくれた」「私にはないものをたくさん持っていた」「逆に自分の励みになった」といった記述などに見られるように、入所児童・入所者に対する視線が高くない。あらためて、保育者を目指す学生たちの素直な目と謙虚な姿勢に感心させられた。入所児童・入所者と施設職員の信頼関係の強さを「家」「家族」を引き合いに出して実感するとともに、入所児童・入所者の主体性を尊重して関わるということを実体験として学んだようである。

②入所児童・入所者の理解に関わる回答から

「最初は戸惑ってどうしたらよいか分からなかったが、段々接していくうちに子ども一人一人の接し方があって勉強になった。」「性格や育った環境、病気の有無などがあり、利用者一人一人に合わせながら平等に接することが難しかった。」といった記述に代表されるように、一人一人への対応ということを入所児童・入所者一人一人に接する具体的な場面を通して、体得していったようである。その助けとなったのは、「職員の方に利用者の方について質問したとき、その方の歩んできた道や時代背景など詳しく教えてくださったので」といった職員への質問、「子どもの言っていることが聞き取れなくても、聞き取ろうとしている姿勢をしていると、それを感じてうれしそうにしてくれて」といった入所児童・入所者への意図的な働きかけである。これは、多くの実習施設が実習評価票に実習生に望むこととして明記している「充実した実習とするための意欲的な取り組みの姿勢」そのものである。

③職員の職務の理解に関わる回答から

「どんなによい環境でも親代わりの保育者が愛情を持って接しなければ意味がない。このことについて本当に考えさせられた。」「職員の方が子どもと関わっているのを見て、聞いて、普通に接すればよいと感じた。」といった記述などに、保育の対象である入所児童・入所者が如何なる状態・状況であっても、保育者は真の愛情を持って関わらなければならないということ、構えずに自然体で

関わればよいということをあらためて噛み締めたようである。さらに、「〇〇ができないから援助するという考えではなく、不自由なところは共に助け合い、より快適に過ごせるように援助していくということを考えた。」といった記述に代表されるように、保育はできないことをしてあげるのではなく、共に活動することで保育対象である入所児童・入所者の主体性や自主性を引き出していくということにもあらためて気付いている。

②の一人一人への対応の体得と併せて回答を読むと、大坪邦資が保育所保育の基本として「保育内容総論」や「保育所実習前指導」で口を酸っぱくする「子どもを看取る」「子どもに対応すること是一緒にすること」ということを、学生は施設実習においても十分に踏まえて実習を行っていることが分かった。

④自己覚知に関わる回答から

児童養護施設などの実習生は「親」「家族」への感謝、知的障がい児施設や知的障がい者更生施設などの実習生は障がいへの「偏見」の払拭や「自分の甘え」への自省を記述している。実習後の口頭での感想では感謝や自省がより多く語られるのに、限られた回答スペースであったので専門的に学んだことを優先して記述したようではあるが、自省も学びであると自信を持って記述されてもよいように思われる。自分の豊かさや親の有り難さに感謝したり、自分自身の生き方を振り返ったりする自己覚知も、施設実習の立派な目的の一つであることをしっかりと学生達に知らせる必要があるようである。

⑤施設を取り巻く社会の理解に関わる回答から

回答が拾い出せなかった。限られた実習期間に、地域や社会に開かれた施設のあり方、地域交流の実際について、どのような学びができるかということから検討する必要がある。

⑥養成校での学習の総括および今後の目標の発見に関わる回答から

記述が少なかった。同じアンケート調査の中の、準備して実習に臨めばよかったと思われることは何か、後輩へのアドバイスは何かといった他の設問に、⑥に関わる記述が分散してしまった。

「実習が障がい者の方について知りたいという切っ掛けになった。」「保育園、幼稚園より施設の方が合っているのかと考えさせられた。」といった記述から、保育所保育士の養成に偏った印象のある本学保育科のカリキュラムでは、十分に自分らしさを発揮できていない学生の存在が浮かぶ。実際に、施設実習を経験して、就職希望先を施設に変えたり絞ったりする学生も少なくない。アンケートの設問も工夫しなければならないが、施設保育士の養成については、保育科や保育関係の授業担当で議論を始めなければならないように思う。

VI. まとめ

これまで、「保育実習Ⅰb」として実施される施設実習の意義は、障がいや家庭の問題といった困難を抱えた入所児童・入所者と直接関わることから、その懸命に生きる姿に「感動する」、偏見や思い込みを払拭して「自分自身を振り返る」ことにあると考え、実習指導でもそのように訴えてきた。しかし、履修後の学生に「何が残っているか、何を得られたか」というアンケート調査を行って、回答を検討したところ、「感動する」「自分を振り返る」といった自己覚知は施設実習の大きな収穫の一つではあったが、保育者として踏まえておかなければならない保育の基本的な考え方や姿勢の獲得が最大の収穫であった。保育は、入所児童・入所者（保育所保育では子どもということに

なる。以下同じ。)を看取ることが第一である。その際、決して入所児童・入所者を上から見ない。保育の主人公は、入所児童・入所者である。その入所児童・入所者の主体性を尊重した保育者の関わりとは、入所児童・入所者と一緒に活動するということである。これは、保育所実習でも、幼稚園教育実習でも、施設実習でも、保育者を目指す学生には等しく学んで、必ず身に付けてほしいことである。

施設実習を他の実習と区別して特別視していたのは、保育園・幼稚園の先生になりたいとの希望を持って本学保育科に入学してきた学生の側ではなかったのかもしれない。施設実習に向けて事前指導などを行うとき、より肩に力を入れて構え過ぎていたのは、実習を控えた学生ではなく、指導する側であったようだ。次年度以降の実習指導に、今回の検討結果を確実に反映させていきたい。アンケート調査によって学生の学びから施設実習を見直すことも、設問を工夫するなどして継続していきたい。

注

1. 主要参考文献・資料5)参照。
2. 主要参考文献・資料3)183頁から引用。
3. 主要参考文献・資料2)94-95頁及び3)183-185頁から集約して引用。
4. アンケート調査は実習状況全般の把握も意図しているため、これらに加え、実習先との事前打ち合わせの状況、交通手段、事前準備の状況、実習を終えて次年度履修する後輩へのアドバイス（平成19年度のみ）、保育士資格の取得に当たってそれぞれが考える施設実習を履修する理由（平成20年度のみ）などについて質問している。

主要参考文献・資料

- 1) 全国保育士養成協議会編 「保育実習指導のミニマムスタンダード」 北大路書房 2007
- 2) 無藤隆監修、鈴木佐喜子、諸岡章編集 「よくわかるNEW保育・教育実習テキスト保育所・施設・幼稚園・小学校実習を充実させるために」 診断と治療社 2008
- 3) 鰐坂二夫監修、赤田博、野村知子編著 「教育・保育実習総論」 保育出版社 1997
- 4) 松本峰雄編著、醍醐定徹他著 「三訂教育・保育・施設実習の手引」 建帛社 1999
- 5) 濱田芳子、佐々木昌代著 「宮崎女子短期大学における幼稚園・保育所実習に関する調査研究(3)」 宮崎女子短期大学紀要第26号 93-113頁 2000